

||||||||||||||||||
書 評
||||||||||||||||||

宇杉和夫著 「見沼田んぼの景観学
—龍のいる原風景の保全・再生—」

古今書院 (2004) 232頁

日本における景観保全は、自然景観の保全を除くと、伝統的建築物保存に代表される都市計画の一環として行われてきた。しかし近年では「棚田」や「里山」に代表される、農業を基盤とするような、日本の生活様式によってつくられてきた「文化的景観」の保全が注目されている。

本書は埼玉県の見沼という、住宅開発の進む県内南部でも、緑豊かな田園風景の残されてきた地域の保全誌が、非常に多くの資料を用いて述べられている。地域的背景に注目して、景観保全のプロセスを分析する研究は近年増えてきているが、本書ほど地域的背景や歴史に着目した保全計画論は今まで皆無であった。

以下、本書の全体構成について示した上で、各章を簡単に紹介する。

本書の構成は、大きく以下の5つのパートに分けられている。第1章「見沼田圃論の形成」、第2章「河川・水路・低地のシステムと見沼代用水の景観」、第3章「見沼田圃と見沼代用水の景観の保全」、第4章「見沼市民活動から環境学習都市構想へ」、付章「原風景再生計画論へ」である。

第1章は、見沼田圃(保全)論の導入部であり、見沼を定義づける重要なパートである。保全対象の地域は、その後の保全計画な

ど具体的な領域として徐々に明確になってくるものの、ここでは沼と湿地、そして東西の用水路という農業用地の形成と3つの「氷川神社」を中心に、空間的位置づけがされている。また、見沼地域の祭祀を空間的にとらえるための事例として、本書の副題にもある「龍」の風景についても述べられている。龍を祀ったのは見沼溜井を田圃に開拓した人々がきっかけであると著者は述べており、地霊として龍を祀っていたことをうかがい知ることができる。祭祀空間についての歴史を追求することは、見沼田圃の景観保全によって大きな意味をもっている。それは、祭祀空間という文化・社会的側面を景観の構成要素の一つと位置づけ、文化と自然両方の景観保全を促していく事だ、と著者は述べている。

保全の経過については、もう一つ「見沼田圃論集」の存在が大きなきっかけになっていると著者は言う。これは、行政が地域の有識者を募って、保全の合意形成を図るための基盤資料として出版されたものであり、当時としては非常に珍しいパートナーシップ型の保全計画であったことがわかる。

第2章では、見沼田圃の農業景観が、水路システムと関連していることについて述べられている。ここでは資料として、著者が1980年代を中心に行ってきた見沼田圃保全に関わ

の講演の記録を用いている。ここでの資料は、主に農業用水のシステムについてのものであり、一般の読者にもわかりやすく解釈できるように図表を駆使して詳しく書かれている。第1章では水路や水域について全体的な概念は示していたものの、具体的な構造を示していなかったため、ここでは多くのページを割いて解説されている。

本章の後半部では世界と日本の治水・農業空間という、見沼田圃から離れたスケールまで解説されているが、日本で広く行われてきた治水・農業システムを見沼田圃のそれと照らし合わせながらうまくまとめられている。ここで著者は、重要な景観構成要素として用水整備の歴史をあげており、第1章で注目してきた神社などの景観と合わせて見沼田圃という景観を生み出してきたことを強調して述べている。

第3章は、本書の約半分にわたって述べられてきた見沼田圃に関する基礎理論をふまえて、具体的な保全計画論と保全の経過が解説されている。

本書は全体を通して図表を多く用いて解説されている点で、読み応えのある内容になっている。本章では特に、実際の保全計画や用水の整備事業計画に使われた（であろう）図表が多く用いられている。これは著者自身が学識経験者として、見沼田圃の保全計画に深く関わっていたからに他ならない。

見沼田圃の景観保全の経過が述べられているパートでは、新聞記事などの資料を用いて「外」から見た保全の経過という視点が盛り込まれている。特に著者は、昭和59年（1984年）を保全にとって特別な年と位置づけている。その理由として、一つには埼玉県知事選

挙があったこと、もう一つには見沼代用水の改修工事が長年の検討を受けて着工の段階に入ったという事を、著者は強調している。保全計画をテーマとした著書にこのような記述があることは極めて少ない。しかし実際の保全計画は、住民運動の成果や行政の政治判断によって大転換するケースが多く、知事選挙を取り上げたことは、見沼田圃の保全政策の転換を、よりリアリティあるものにした点で評価すべき部分であろう。

第4章では、見沼田圃の景観保全が具体的に始まった初期の状況と市民活動について取り上げられている。ここでは、著者自身も代表世話人として立ち上げに参加した「見沼田圃を愛する会」を中心とする、景観保全に関わる市民活動の取り組みが紹介されている。また、見沼田圃を対象とした「環境学習」にも著者は注目している。この環境学習は、景観保全を啓発し進展させるだけでなく、将来、地域の景観保全を担うことになる「子供」をターゲットにすることで、非常に大きな意味をもっていることがわかる。

後半部では、見沼田圃で得られた知見を拡張して、都市計画・ランドデザインに如何に緑空間整備を取り入れるかについて言及されている。ここでは、今までの見沼田圃という地域的事例から離れて、大宮一首都圏一国土というマクロな視点に立った議論が展開されており、総括的な位置づけにあたる。しかし、著者は一貫して「原風景」を再生することの重要性を強調しており、身近な自然環境や、歴史的・社会的な景観への注目の必要性を述べている。

最後の付章では、第4章でまとめられたマクロな空間スケールに対する言及を、再び見

沼田圃という地域に戻した上で昭和60年代以降の若干の議論も含めてまとめられている。

見沼田圃を事例とした保全計画論は、関連する周辺の都市計画に関連的に、有効に位置づけ活用することが大切であると、著者は述べている。

多くのページを割いて著者は、景観保全の対象となった地域の状況を詳しく把握することが重要であると強調している。一方、ここで得られた知識や技術がどのように活用されるかを検討することも重要な視点であると評者は考える。それ故に第4章と付章は、著者としての結論という意味だけでなく、読者にとっても大きな意味を持っている。しかし、当該地域に住む一般の住民が景観保全に対してどのような意識を持って生活しているか、どう取り組んできたかについては残念ながら

本書を通じて詳しく語られることはなかった。このような議論は、是非「続編」という形で、知る機会が得られる事を著者には期待したい。

本書の最後でも述べられているように、見沼田圃の「原風景再生計画」は決して終わったわけでは無く、将来居住する人も計画者の一人として対象になる。同様に全国各地で活発に展開されている景観保全も終わりはない。従って本書が広く読まれ、自分たちの住んでいる地域の事例と照らし合わせながら、活発な議論が展開される事を評者として切に願う。

文 献

千田 稔・前田良一・内田忠賢編 2001『風景の事典』古今書院。

(立命館大学文学部・実習助手 瀬戸寿一 記)